

第一回 嬉野市総合戦略推進委員会 議事要旨

日時：2015年5月27日（水） 10：30～12：10

場所：嬉野市役所塩田庁舎3階 3-2・3-3会議室

◇出席委員：毛利委員、戸田委員、副島委員、前田委員、田中委員、村上委員、熊谷委員、
林委員、松永委員[計9名]

◇欠席委員：なし

【次第】

1. あいさつ
2. 委員・事務局自己紹介
3. 委員長・副委員長の選出
4. 委員長あいさつ
5. まち・ひと・しごと創生 ビジョン・総合戦略の概要説明
6. 嬉野市の人口の現状分析と将来推計
7. 意見交換
8. 今後のスケジュールについて
9. その他

1. あいさつ

(企画政策課長あいさつ)

2. 委員・事務局自己紹介

(委員(9名)・事務局(3名)自己紹介)

3. 委員長・副委員長の選出

委員長：戸田委員

副委員長：熊谷委員

4. 委員長あいさつ

○委員長

この場では、遠い将来と近い将来と両方を考えながら、日々の生活や仕事で蓄積してきた考えを、自由に活発な議論できることこそが、嬉野市のためになることだと思う。

5. まち・ひと・しごと創生 ビジョン・総合戦略の概要説明

(国の説明資料(DVD)視聴、資料説明)

6. 嬉野市の人口の現状分析と将来推計

(資料説明)

7. 意見交換

○事務局

新成人から聞き取ったところ、学生の際に市外に出た場合は、雇用がないので卒業しても戻ってこない、という。

○委員

若い人を集めるのなら、王道は企業誘致ということになるが、嬉野ではこの5年間はできていない。武雄市は誘致が出来ていて、差が出来ていく。

企業誘致は王道であるが、不況で事業所閉鎖が連鎖するなど経済動向に左右されるので、そうではない分野で、例えば茶農家で若い人が多く頑張っていて、そのような自発的な発展もパッケージで考える必要がある。

○委員

嬉野市の賃貸家賃は、武雄市の賃貸と同じような間取りで家賃が変わらない。そうであれば武雄に住む方が便利だ。

企業を誘致するのは5カ年では無理かもしれない。しかし、嬉野から大村は通勤圏内であり、佐世保は通勤圏内であり、武雄も通勤圏内である。嬉野は環境も良いので、そのことをアピールしてはどうか。

○委員

家賃が変わらないのは、建設費に差がないためで、アパート建設の際の借金返済の関係上、地域が違って家賃が変わらないということがある。

○委員

移住して借りた人に助成するのではなくて、オーナーが家賃を下げやすい環境を作れないか。

○委員

住んでもらわないと地域にお金が落ちないので、地域のお金の循環という観点では、住んでもらうために助成しても生活することによる消費等で還元できるはず。市財政の借金が増える方向の支援ではなくて、地域で循環できるように補助や助成を使っていく必要があるのではないか。

○委員長

住み替えをする世代をターゲットとした何らかの手だてが考えられるのではないか。子育て支援の中でも住環境を中心に考えるのも面白い。

○委員

親も、嬉野市に帰ってこなくていい、家も継がなくていいと言って大学に出す。それをどう食い止めるか。

○委員

子どもたちが、嬉野が住みやすいという認識を持っていても、今は、例えば東京に出て、九州に戻りたいとなったら福岡に住むとなってしまう。嬉野からでも新幹線や高速道路を使って福岡や長崎にすぐ行けるということで、通勤圏内として若い世代、特に女性が戻ってきやすい雰囲気作りが必要だ。

○委員

佐賀県も福岡市内に通勤圏内だというプロモーションをしたのをあまり見たことがない。ハウスメーカーを含めて色々なところにアプローチして、それに福岡市内の企業にもプロモーションしていく必要がある。

○委員

郷土愛があって、地域の人たちがいい人ばかりで、子どもを育てやすいという地域性はあるが、大学で外に出してしまう。

○委員

子育ては、してもらうものではない。自分がするものだし、近所との助け合い。自助・共助・公助で、全部がうまくバランスとれていないと、共助・公助だけが強くなっても困る。

○委員

豊かさを何に求めるのが重要だ。若い人はお金を使いたい世代なのでたくさん使えるところを求めて外に出てしまう。ある程度年を重ねるとお金を使う事よりも静かな所でゆっくりと自分の時間を過ごすことの重要性に気づくようになる。(本を読む、好きな料理を作る、山間地域へ入って作業をするなど)

そういったお金の使い方の楽しさだけでなくこのような環境で過ごす豊かさの観点を生活や教育の中で少しずつ植え付けてあげることで若い世代ではなくとも30代、40代くらいになると時間の使い方を切り替える人が出てくるのではないか。また、そのような人を子どもの頃から育てていけないといけない。例えば農家の親は子どもに苦勞をさせたがらないので後を継がなくていいような話も出ている。特に佐賀県は第一次産業で成り立っているので第一次・第二次産業の魅力をもっと子ども達に伝えていく責任があ

る。

○事務局

市役所の若手職員に地方創生について話を聞いたところ、学生の頃に奨学金をもらって大学まで進学した。そのことがあって地元に戻って仕事をするのが恩返しになると思った。という話もあった。

○委員

行政はストッパーをかけてはいけない。(奨学金受給者は地元に戻ってくることが条件など)このような良い事例を悪い事業に組み入れることがないように。

○委員

私は普段から子ども達と接する機会が多いので、常日頃から「ふるさと」の良さを子どもに伝えてくということを考えながら行動している。(例えば佐賀には美味しい食材がたくさんあるなど)

○委員長

茶業や観光業のように嬉野で注目される産業以外に従事している人たちに嬉野に住んでもらうようにする。

○委員

島根県雲南市では、“定住サイト”というもので、移住してきた人たちの声を紹介している。嬉野でも、どういう生活が待っているかを紹介する方法があるとよい。

○委員

嬉野市は土地が高いイメージがあり、実際高いので、生活の固定費となる住宅費を安くする方策が必要だ。

○委員

嬉野に引っ越してこようかと思ったが、嬉野には妻の仕事がない。住むところを考える上で、就職が一番大事。あるお客さんからは、人手がないかという相談を受け、あるお客さんからは仕事口がないかと相談を受ける。嬉野で働きたくても仕事がなく、武雄に仕事があるから武雄に住んでいるという人たちが、嬉野に住んで嬉野で仕事ができるようになるといい。

高校卒業して、嬉野に残りたくても仕事がない現状だ。インターもあるのに企業誘致が十分でないと思う。幼稚園も足りていないのではないか。

○委員

観光客も少なくなっている感じがするので、盛り返せるように施策ができないか。

○委員長

仕事がないから出ていかざるを得ないという問題がある。

○委員

いま、嬉野市で雇用されて働いている女性がどのくらいの割合でいるのか。いま働いている人が年齢を重ねて辞めた後、その欠員を補充することで雇用が確保できるということにならないか。今どのくらいの女性が働いていて、その働いている場所が将来的にも持続的にあるのか、雇用を継続していくめどがあるのかということが知りたい。それでも雇用する場所がないということであれば雇用の場が必要であるし、人口が減っていくので、一方では雇用の場があっても雇う人がいないということになってしまうかもしれず、そのあたりの将来的なバランスの分析が必要なのではないか。

人口の動きの分析と、どのくらいの規模の企業を誘致するのがよいのかという分析が、5年後ということではなく長い目で見た時にはあった方がいいのではないか。企業を誘致した際に人がいないということにならないようにしないといけない。

○委員

女性が多く働く職場にターゲットを絞って誘致することも有効なのではないか。

○委員長

女性の職場があるということは、居住地選択の誘因になる。

○委員

佐賀県の西地区の支店に勤めるパートの女性はあまり離職しないが、東地区の女性はほかにも仕事があるので離職することが多い。

8. 今後のスケジュールについて

(事務局より説明)

○委員長

事務局は、会議資料を時間に余裕を持って配付してもらいたい。

9. その他

特になし